

## 論 文 要 旨

氏 名	白 木 光
タイトル (日英併記)	<b>Influence of Age on Associations of Occlusal Status and Number of Present Teeth with Dementia in Community-Dwelling Older People in Japan: Cross-Sectional Study</b> (日本の地域在住高齢者における咬合状態と現在歯数および認知症との関連に与える年齢の影響：横断研究)

### 論文の要旨

世界の認知症患者数は2050年までに1億5,200万人に達すると予測され、2030年までに認知症の社会的経済コストは最大2兆ドルに増加すると推定されている。したがって、認知症の早期発見と危険因子のコントロールは、社会経済的コストを削減し、健康寿命を延ばすための予防政策の重要な要素である。認知症は多因子疾患であり、低学歴、高血圧、聴覚障害、喫煙、肥満、うつ病、運動不足、糖尿病、社会的接触の少なさ、過度のアルコール摂取、外傷性脳損傷、大気汚染などの修正可能な危険因子が関連していることが報告されている。近年、認知症と咬合状態および現在歯数との関連が指摘されている。しかし、認知症と咬合状態および現在歯数との関連性の違いならびに年齢の影響について検討した研究は我々が知る限りほとんど認められない。そこで、地域在住高齢者における歯の喪失と咬合状態および認知症との関連、ならびに年齢の影響について検討することを目的とした。

本研究は横断研究であり、2015年4月から2020年11月まで福岡県豊前市で実施された「在宅訪問口腔ケア事業」から得られたデータを用い、含有基準は、豊前市在住で40歳以上、国民健康保険および後期高齢者医療保険に加入していることとした。その結果、合計218人の地域住民がリクルートされた。このうち、65歳未満(n=2)の者と調査項目の一部(年齢、認知症の診断および口腔関連)が欠損している者(n=20)を除外したところ、196名(女性64.3%、男性35.7%、中央値年齢：84歳)を解析対象者とした。現在歯数、人工歯数を含む歯の状態を評価し、咬合状態については、対になった天然歯または人工歯の数に基づいて、Functional Tooth Units (FTU)を算出、評価した。認知症の有無は、精神科医または神経内科医による臨床診断に基づいて評価された。統計解析では、認知症の有無を目的変数とし、FTUまたは現在歯数を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。その後、中央値年齢で層別化したサブグループ分析を行った。また、調整因子として、年齢、性別、教育歴、高血圧ならびに糖尿病の有無、喫煙歴およびMini Nutritional Assessment®-Short-Formを用いた。

その結果、FTUが高いほど認知症リスクが低いことが示された(オッズ比：0.87；95%信頼区間：0.78–0.96； $p=0.006$ )。さらに、年齢の中央値で層別化した結果、84歳未満においてその関連が大きくなることが明らかになった(オッズ比：0.82；95%信頼区間：0.68–0.97； $p=0.018$ )。一方、現在歯数と認知症との有意な関連は認められなかった。

本研究結果から、地域在住高齢者において咬合状態が良好な者ほど認知症のリスクが低く、咬合因子が若年高齢者の認知症発症に大きな影響を及ぼす可能性が示された。加えて、これらの関連には年齢が重要な役割を果たしていた。そのため、認知症予防のためのプログラムを構築する際には、咬合状態の維持だけでなく、年齢の因子をプログラムに組み込むことが効果的な施策につながるために重要であることが示唆された。